

港湾都市「仁川」の意外な一面を発見 ～第4回クレアソウルセミナーの開催～

ソウル事務所

ソウル事務所では、韓国に駐在している日本の地方公務員の方々等を対象に、韓国の政治、経済、文化等についての理解をより一層深めていただくとともに、普段は各派遣先で勤務している会員同士がネットワークを構築し、今後の業務遂行の一助とすることを目的としてクレアソウルセミナーを実施しています。

今年度第4回目は、2013年1月31日、2月1日の二日間にわたり、仁川広域市を訪問しましたので、その主な内容について報告します。

1. 仁川広域市の概要

首都ソウル特別市から約30km離れた場所にある仁川広域市は、港湾都市として栄え、2001年には仁川国際空港が開港したことで、韓国の海と空の玄関口となっています。人口は、約280万人で、人口規模では、ソウル特別市、釜山広域市に次ぐ第3の都市です。

2003年には、政府から仁川国際空港と港湾をはじめとする地域が経済自由区域に指定されたため、東北アジアビジネスの中心となるべく、国際業務、知識基盤産業の集積や、IT等の先端産業の開発を進めています。

2. 2014 第17回仁川アジア競技大会組織委員会の訪問

仁川アジア競技大会の準備・運営等を目的に運営されているアジア競技大会組織委員会を訪問し、国際本部チーム長から大会についての説明を受けました。

競技場は 49 会場を使用する予定で、その中の 23 会場を新設予定であり、仁川広域市だけでなく隣接都市にも建設中のことでした。また、今回の競技大会を通じて、アジアに仁川を PR したいとの思いがあり、海外 6 都市でも PR を行っており、今後もマスコミ等を通して積極的に PR していきたいとのことでした。

さらに、観覧客 200 万人を大会の目標としており、主に中国、東南アジアからの訪問を期待しているとのことでした。



組織委員会での集合写真

3. 世界でも珍しい^{こうもん}閘門式の港 ～国際貿易港仁川港～

仁川港の港湾施設と港湾団地を開発して、管理・運営等の業務を行っている仁川港湾公社を訪問し、仁川港についての説明を受けました。

仁川港は世界でも珍しい閘門式の港です。

閘門とは内港と外港の水位が異なる場合に水位を調節するための施設で、仁川港の閘門は、1974 年に、最大 9m にも及ぶ潮の干満差に対応するために建設されました。

(※閘門式の仕組みについては下図参照)

内港は閘門のおかげで波が立たず、常に一定の水深を保つため、自動車や精密機器などの荷役に最適な条件を備えています。

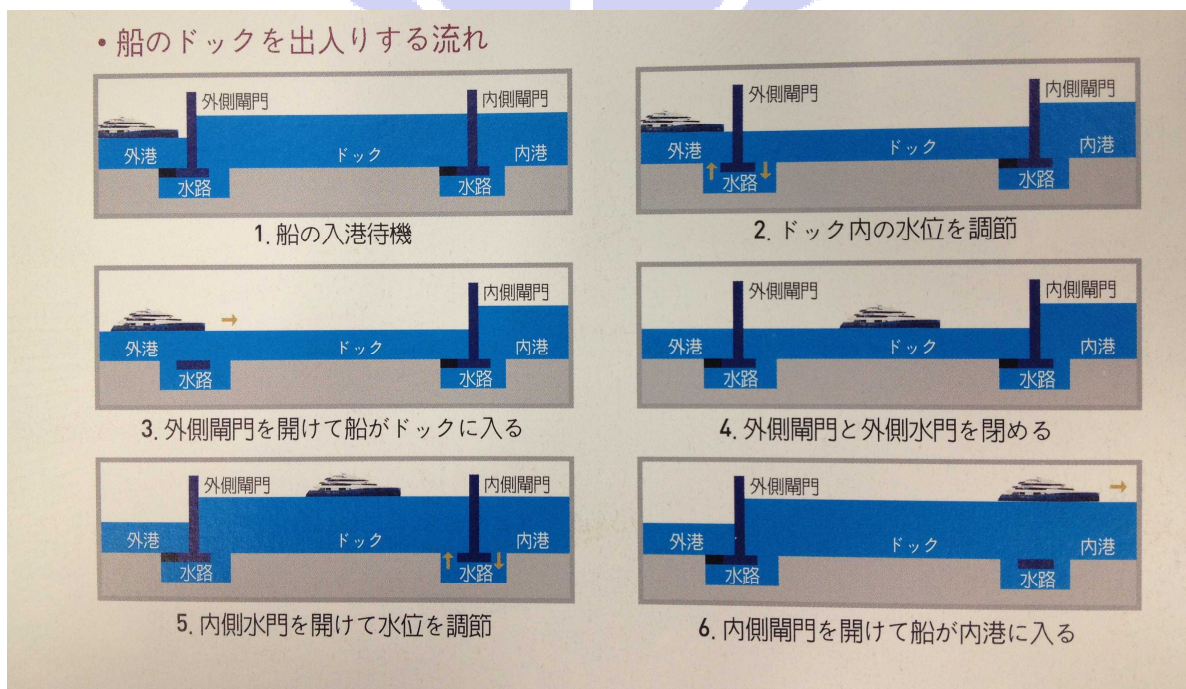
2011 年の仁川港の貨物輸入は、石油ガス、石油精製品等合計 123,295 千トン、輸出は自動車及びその部品等 27,373 千トンであり、これは韓国の港では、釜山港、麗水光陽港、蔚山港^{うるさん}に続く第 4 位の物流量です。

その後、バスで仁川港の内港を視察しましたが、仁川港からの輸出を待つ車の数に圧倒されました。仁川港からは GM の車が多く輸出されるとのことでした。(大宇自動車を買収した GM の工場が仁川広域市にあるため。)



船積み前の車

(奥に見えるのが車専用の輸送船)



閘門式の仕組み

4. 仁川の中の外国 ～仁川英語村～

この仁川英語村は、外国と等しい環境で英語と外国文化を自然に接することで実用英会話の能力を開発することを目的に作られました。

英語村を運営する(財)GlobalEdu は、元々は企業の英語教育を行っており、そのノウハウを基にして 2005 年に仁川広域市から英語村の委託運営機関として選定され、2006 年に開校しました。

ここでは、学生だけでなく仁川広域市の公務員や企業等の英語教育のために利用されています。ちなみに、韓国では、小学校での英語教育が 1997 年から行われています。

現在までに、韓国内の小中高大学生、公務員、企業及び英語教師等多様な年齢層で、さらには、日本、中国、ロシアなど海外の人々にも利用され、10 万人以上の修了生を輩出しています。

プログラムの日程は一日体験から 29 泊 30 日まで多様で、内容は空港やホテルでのロールプレーという簡単な内容から、生活・文化生活体験、ビジネス英語まで幅広く行われています。それぞれの訪問者の希望に応じてプランを組むことができるとのことでした。訪問時にもネイティブの教師により学生団体が授業を受けていました。



仁川英語村での授業風景

5. 仁川のこれから

今回のセミナー参加前には、仁川は港湾都市、国際空港都市というイメージが強く、観光面で言えば、ソウルへ行くための通過都市としてのイメージが強くありました。しかし、今回のセミナーを通して、アジア大会を行うことで、スポーツを通しての海外 PR、英語村を通して教育都市として PR するなど、既存の観光地を利用するのみでない多様な取組を行っていることがわかりました。

今後、国際貿易都市、国際観光都市、国際教育都市として発展していく仁川広域市の成長過程を見ていきたいと思います。

(宮下所長補佐 愛媛県派遣)